

法栄寺歳時記

2026年
4月23日
第153号
発行
法栄寺門徒会

春彼岸会法要

三月十二日
(日)
午後一時より彼岸の法要が厳修されました。



真宗寺の住職・当寺の住職・法務員の三人による読経の中焼香がありました。その後、法話が二席ありました。この日の講師は、当寺の住職 森口 宏文 師でした。

三帰依文唱和・前住職一周忌法要報告に続き、娘さんと交わした会話を機縁に、浄土について説かれました。

浄土は、清やかな国土で、綺麗な水があり、穢れ・煩惱・私達を煩わすことのない世界。

反対が、穢土で、我々の世界であり、阿弥陀経には、劫



濁・見濁・煩悩・衆生濁・命濁の五濁悪世とあるそうです。



我々の一生を道で説かれました。

我々は、産道を通って生まれてくる。その後人生を歩むが、これが求道。人生には、紆余曲折があるが、どんな事も引き受けて生きぬくのが真宗の生き方と説かれました。

大切な亡き人は、私達の諸仏となる。諸仏からどのように願われているか、それを聞くのが聴聞であり、その場がお寺であると説かれました。

僧侶になつて、色々な場を通して気付かされることがある。今自分があるのは、沢山の人のお陰、迷惑も沢山かけてきたなど気付く、これが自覚道とご自身の体験・ご門徒の話を交

じえ説かれました。
生死の世界を超えて、自覚道から清浄なる仏になる、成仏道と説かれました。

法事について、前住職の話を紹介されました。「法事は、そこにいる人だけで勤めたらいい」と。亡き人を偲びながら、仏の教えに出会っていく場が法事と説かれました。

冊子「誰の為の法事」を紹介され、昨今の世知辛い環

法栄寺定例法話会

四月九日(木) 午後一時より定例の法話会がありました。この日の講師は、二年前にもご縁を頂いた、札幌市清田区の顯浄寺住職 宮本 尊文 師でした。

三帰依文唱和・参詣への謝辞・自己紹介に続き、浄土真宗の教えについて話すと始められました。

伝統仏教は十三宗あるが、釈迦の教えが基本にある。目的は同じで成仏・菩提(仏の智慧)と



境の中で、非宗教化の現実には直面、亡き人を偲ぶ場が少なくなつてると嘆かれました。

真宗の法事は、亡き人の為ではない、生きてる私達に向けて問いかけ呼び掛け、一緒に問い続けていきたいと括られました。

二席目は、浄土真宗の作法という事で、焼香の作法、更に「お内仏の荘厳と作法」から二枚プリントを配られ、お給仕を説明されました。何時になく、最後に質問を受けられました。



説かれました。仏の智慧とは、真実道理の法であり、どんな人にも・どんな時代でも必ず当てはまるもの。私達は、人間として生まれてきた。他の動物と違うのは、生物の道理を知りながら生きることが出来る唯一の存在。生物の道理とは、生老病死。私達は、それを拒む。仏様は、慈悲をもつて、生老病死をどう生きるか教えてくれると説かれました。

どうしたら仏の智慧を頂けるか。戒律を保ち修行を完成させると五戒と修行について説かれました。その中で、盗むは、窃盗だけでなく時間を奪う等もいうという事です。また、三大煩惱(貪欲・瞋恚・愚痴)についても説かれ、俱生起の煩惱という事です。

生まれたての赤ちゃんは、煩惱がない、本能だけ。起きている事を全て引き受けている姿、一如であり仏の世界と説かれました。

その後成長して言葉を覚え、四・五才で一人称を使いだす。自我の芽生え・目覚めである。自我は、私にとつての当たり前、我執である。その煩惱を断つのが修行。出来ますか、出来ないと言われました。

出家は、社会・人間関係を断ち一人になる。

法栄寺門徒会奉仕活動

【清掃奉仕】

三月二十五日(水) 午前九時より、お彼岸の後片付けをしました。何時もながら、お供え物の処分は大変でした。

《奉仕活動参加者》 敬称略

末吉、羽野、竹内、三上夫妻、井齋、録念、廣中、大場ミキ子、山田、楠美

従つて、比べることも・欲しがることもなく、腹も立たず愚痴もはかない。在家は、社会生活をし、誰かと共に生きるから煩惱が起る。煩惱具足の凡夫である。仏教のルールでは救われたい存在。これを救いたいと願ったのが本願と説かれました。

本願は、四十八有るが、たつた一つのこと(浄土建立)を願うために、人間の四十八の現実を通して誓われたものと説かれました。

第一願では、地獄・餓鬼・畜生。第二願では、菩薩の選び。第三願では、肌の色。第四願では、形色不同という事です。色々な譬えを出され丁寧に説かれました。

他にも沢山のことを説かれましたが、浄土真宗の教えは、聞法の継続と念仏の実践と結ばれた。